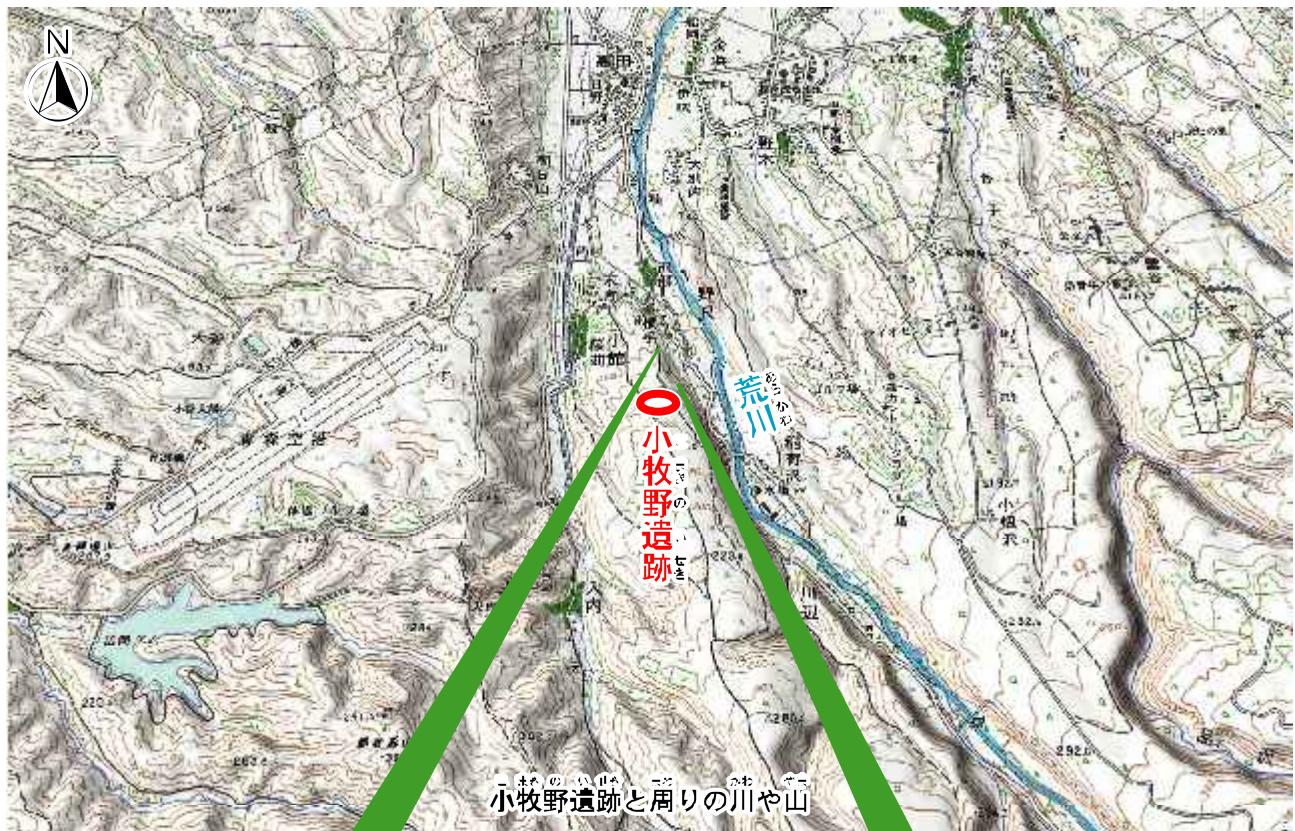


ストーンサークルの石はどこから?

ストーンサークルは、普通、見晴らしのよい台地の上に作られます。このような台地の上には、ストーンサークルの材料となるような河原石はほとんどありません。材料となる河原石は、台地の下を流れる川からわざわざ運んできたものです。さらに、河原からは手当たりしだいに石を持ってきたわけではないようです。ストーンサークルに使われている石には、200kgを超えるような巨大な石や、細長い棒状の石などもたくさんあり、形や大きさをよく見て選んできたことがうかがえます。例えば、大湯環状列石では、台地のすぐ下を流れる大湯川の河原からではなく、4km以上離れた安久谷川の河原から緑色の石を選んでわざわざ運んできたと考えられています。



小牧野遺跡では、ストーンサークルのある台地の80mほど下を流れる荒川(堤川とも言います)から石を運び上げたと考えられています。小牧野遺跡では、それぞれ木ソリ、背負子(荷物を背負って運ぶ道具)、もっこ(網を網のように編んだもの)を使って河原から石を運び上げる実験が行われています。実験の結果では、石の大きさにもよりますが、背負子を使って背中に石を乗せる運び方がもっとも運びやすかったようです。ただし、木ソリやコロなどで、みんなで力をあわせて、お祭りのように運んだという考え方もあり、もっとも効率的な方法で石を運んでストーンサークルを作ったと考えるのは、あくまでも現代風の考え方で、縄文人はもっと別の考えがあったかもしれません。



木ソリで石を運んでいる様子



背負子で石を運んでいる様子

ストーンサークルは何のために作られたの？

大湯環状列石は、墓石がある墓穴が環のように集まつたものという考え方を、先に紹介しましたが、実は、大湯環状列石が戦後まもなく発掘調査されたころから、ストーンサークルが作られた目的については、もう一つの有力な意見がありました。それは、マツリをするための祭壇のような場所だったという考え方です。

大湯環状列石が発掘調査されて以来、各地でストーンサークルが見つかって調査が進んでいます。青森市の小牧野遺跡では、大湯環状列石とは違つて、お墓はストーンサークルの東隣に100か所以上作られています。ストーンサークルは場所を区画するために作られたようで、マツリのための神聖な場と考えることもできそうです。ただし、小牧野遺跡のストーンサークルには、亡くなつた人の骨を納めた骨壺と考えられるものも見つかっていますので、お墓としても使われたものと考えられます。





また、近年、ストーンサークルは、夏至や冬至などの特定の日の、日の出や日の入りの方向を意識して作られていたのではと言われています。例えば、大湯環状列石では、野中堂のストーンサークルの中心から万座のストーンサークルの中心を結んだ線の延長線上に夏至日の太陽が沈むと言われています。大湯のストーンサークルを作った人たちにとっては、太陽の動きに重要な意味があったのでしょうか。あるいは、夏至の日にマツリをする風習があって、その時期を知るための目印としていたのかもしれません。



このようなことを見てくると、ストーンサークルはお墓であったとか、マツリのための祭壇のようなものであったとかいうようにはっきりと決めることは難しく、ある時にはお墓が作られ、ある時にはたくさん的人が集まっておマツリをするというように、いろいろな目的で使われたと考えたほうがよさそうです。

ストーンサークルを作った人たちの住まいは?

ストーンサークルを作った人たちの住居はどこにあるのでしょうか。例えば、大湯環状列石では当時の竪穴住居が16軒ほど、小牧野遺跡では数軒の竪穴住居がそれぞれ見つかっています。



ところで、これらの住居は同時にあったものは少なかったようです。また、このほかのストーンサークルではお墓などはあるものの、住居が見つかっていないところも少なくありません。

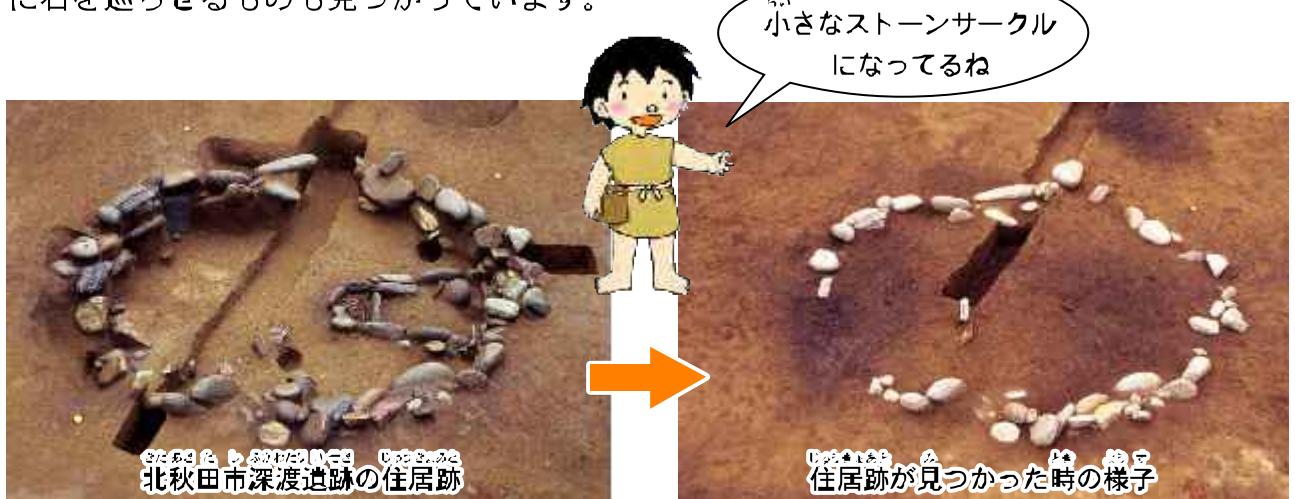
これらのことから、ストーンサークルの周りに住んでいた人たちだけでは、何千個もの石を運んで、ストーンサークルを作ったとは考えにくく、おそらく、遠くからもたくさんの人々が集まって作ったようです。実は、ストーンサークルを作った多くの人たちが普段どこに住んでいたのか、あるいは、ストーンサークルの周りにはどのようなムラがあったのかといったことはあまりよく分かっていません、いわば大きな謎の一つなのです。

この謎について考える時の参考になるように、少し時間をさかのぼって、ストーンサークルが作られる直前の時代、縄文時代中期後半ごろ(今から4500年ほど前)のムラや住居の様子を見てみましょう。

縄文時代中期後半ごろには、当時の人たちのムラが見つかっています。中には、真ん中に広場があって、その周りに住居が巡る大きなムラ(「環状集落」と呼んでいます)もあります。



また、このころには関東地方から東北地方南部にかけて竪穴住居の囲炉裏や出入口に石を敷いたり、石を巡らしたりすることが流行するようになり、北日本でも住居の囲炉裏や壁に石を巡らせるものも見つかっています。



このように、縄文時代中期後半にはムラが見つかっているのに対し、縄文時代後期のムラはよく分かりません。これは、以前よりも気候が悪くなって、ムラの周囲だけでみんなの食べ物を充分に集めることができなくなつたために、散らばつて住むことになつたせいではないかという考えがあります。大湯環状列石などで見つかっている住居は、散らばつて住むことになつた人たちの住居の一つ、中でもストーンサークルを管理する人たちの住居だったのかもしれません。

ストーンサークルを作った人たちのマツリ

ストーンサークルの内と外ではお墓を作ったり、さまざまなマツリをしたと考えられています。大湯環状列石では、墓穴の上に石を組んで墓石としていますので、今で言うお彼岸のような特別な日に、亡くなった人の家族や子孫がお参りするようなことが考えられるでしょう。

また、ストーンサークルの周囲には、大きさが4mほどの丸や四角く石で囲った配石遺構が見つかる場合があります。この中には火を焚いた跡があることもあり、ここで焚き火をするなどのマツリをしたことも考えられます。

このほか、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡では、ストーンサークルの周りに建物が巡っていますが、この建物が人びとの住居かどうかはっきりしません。普段はストーンサークルから離れたところに住んでいた人たちがやって来て、この建物でマツリをしたのかもしれません。



小牧野遺跡の配石遺構



大湯環状列石の建物

この建物はいろいろ調べて
復元したものだそうだよ



これらのことからは、ストーンサークルは、人びとが家族が亡くなった時にやって来てお墓を作ったり、先祖の墓をお参りしたり、あるいは、かつて同じムラで一緒に生活していた人たちが、みんな集まって盛大なマツリをした場所なのでしょう。

ところで、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡などでは、石で作られた矢尻やナイフのような普段の日常生活に使った道具ではなくて、マツリの時に使ったと考えられる道具がたくさん見つかっています。これらの道具は、粘土で形を作って焼き上げたものと石を細かく打ち欠いたり磨いたりして作ったものとがあります。

いずれのものも、食べ物を獲ったり、木を切ったりする時に使うような、いわば実用的な道具ではありません。しかし、当時の人たちにとっては、マツリの時などに使う重要な道具だったのでしょう。

これらの道具は、どのようにマツリで使われたのでしょうか。残念ながら、実際の使い方はよく分かっていません。道具をよく観察しても、使った痕跡はほとんど分かりません。

これらの道具は、見つかった時にはあまりこわれていないものがほとんどなため、こわれたために捨てられたわけではなくて、マツリのたびに捨てられたのかもしれません。



ところで、北海道森町の鷲ノ木遺跡などでは、ストーンサークルの中からは、マツリの道具と考えられるものはまったくと言ってよいほど見つかっていません。ストーンサークルの中には神聖な場所だったので、マツリのたびにきれいに掃除をしたのか、あるいは、もともとマツリの道具をあまり使わなかったのでしょうか。

同じストーンサークルで行うマツリでも、地域によってはさまざまなマツリのやり方があったのかもしれません。これから各地のストーンサークルの調査や研究が進んでいけば、もっと詳しいことが分かってくるでしょう。